

【書評】

高橋 源一郎著『ぼくらの文章教室』

朝日新聞出版, 2013年4月, 276頁

土 屋 博 嗣

書名の『ぼくらの文章教室』からは、この本が、自らを僕らと自称できる若者を対象に、文章がうまく書けるようになるための技術や注意すべきポイントを教えるための本であろうと想像される。著者自身、本の中で「どうすれば『上手』な『文章』を書けるのか、そのやり方についても考えてみたい」と書いている。

しかし、この本を手にとって読み始めた読者は、冒頭の「1 文章は誰のものか? それは、ぼくたちのものだ」に取り上げられている「木村セン」さんの文章に出くわして驚かされる。木村センさんは、貧しい農婦だったが、骨折して身体が思うように動かせなくなってから、文字の手習いを始めた。家族には分からなかったが、働けなくなったセンさんは、遺書を家族に残そうと思ったのである。その遺書が、著者が「これは、誰もが読むべき文章だ」と言って、挙げている文章である。この文章から何を学ぶべきか、と言うことで、著者が挙げているポイントは、「① センは文章を自分で学んだ」「② センには書きたいことがあったいや、伝えたいことがあった」「③ センには伝えたい相手があった」「④ センの文章の秘密」である。センの文章には、労働の果てに死んでいった無名の農婦の「顔」があるという。

続く「2 都会の雑踏を文章と一緒にあるいてみよう」では一変して、女子学生の書いた『走れメロス』のパロディーの文章を取り上げている。「メイド喫茶」でアルバイトをしている女の子が、友人を守るために半熟玉子オムライス作りに挑戦する話である。ここで著者は、『生きる』ことを書くこと、直接に書くこと、自分が生きるという

ことを見据えること。それがそのまま『自由』であることに繋がること」という。

「3 おじいちゃんが教えてくれる」で初めて小説家の文章が出てくる。小島信夫が最晩年に書いた『残光』の中の会話場面を取り上げ、どの言葉が登場人物の誰の言葉であるか判断できない文章であり、それをそのまま本に残した作家の思いを書いている。作者の小島さんは「もしかしたら、半分ぐらいは『ボケ』ていたかもしれないが、心の奥底では、途轍もなく明晰だったのだ、と思っている」と書き、「社会」や「世間」に縛られずに言葉を使うことを狙っていたのではないかと考える。そして、読者に次のように問いかける。「あなたが、この社会で生きている限り、あなたは、『二倍になった(粉飾された)あなた』として文章を書かなければならない。これはあなたが引き受けなければならぬ厳然たる事実だ。あらゆる文章読本、あらゆる国語の教科書は、そのように教えている」と。しかし、「人間として生まれたからには、極めてみたい、人間的に自由へ至る道。でも、現実には、受け入れなければならぬ、『社会』や『世間』が用意してくれる道。そのどちらかの選択ではなく、その両方を、我が手にするやり方があるんじゃないだろうか。そのために、ことばがあるんじゃないだろうか」という。

「4 こんな書けない!」には、二つの文章が紹介されている。一つは多田富雄さんの昭和天皇の「殯葬の礼(ひんそうのれい)」に参列したときの文章で、多田さんの特殊な体験をもとにしているだけに、他の人には書けないものであるが、それだけではなく、『人生』を強く感じさせる文

章には、『名文』以上の何かが含まれているのである。そして、「人生」の「豊かさ」は、「その人物が、自らの『人生』を見つめる視線の『深さ』によるのである。そして、誰にでも『人生』はあり、誰でも、それを見つめる視線は持っているのだ」という。

あと一つは、以前池袋で餓死した母子が発見されたことがあったが、その77歳になる母親が残した餓死する直前の覚え書きである。飢えに苦しみながら、意識を失いそうになりながら、誰に向かって書いているのか。生きていうちに、自分の文章を読んでもくれる人はいないことが分かっているながら、なぜ書き続けたのか。「その苦しみは、文章に書いて存在させなければ、自分を喰い殺してしまう、と母親は思ったのかもしれない」。「これは、生きてゆくために、正気でありつづけるために、人間でありつづけるためには、ことばしか武器がなかった人間が書いた、文章である」という。

「5 スティーブ・ジョブズの驚異の『文章』」では、スティーブ・ジョブズが行った大学の卒業式でのスピーチが取り上げられる。ここでは、この文章を魅力的で感動的にしている秘密について解説する。全体を三つの話に分け、それぞれの話にタイトルをつけていること、自分の人生・仕事・近づいた死について、聴衆である学生がイメージできるように固有名詞を挙げ距離を数字で表しているなど、具体的に語っていることなど。このスピーチは、彼の行ってきた商業的プレゼンテーションと同じように、さまざまな仕掛けがあるという。

「6 『ない』ものについて書いてはいけない『ある』ものについて書かなきゃならない」では、ある小さな集まりで出会った「文章」の専門家でない、いわゆる社会人が書いた文章を扱っている。1年にわたるアジアでの一人旅の中で出会った一冊の本をめぐる話である。筆者は、一年の旅の間には、多くの貴重な経験をしたに違いないが、それは書かずに、自分が売った本と遠く離れたところで再会するという「旅する本」の話を書いている。著者は、『文章』を書く、ということは、この『わけのわからないもので一杯』の世界を、

少しでも『わけのわかるもの』にするために、輪郭を与えることだ。そのためには、まず、一つでいいから、自分の知っているもの、そして、同時に、誰でも知っているもの、それから始めてみてはどうだろうか」という。

「7 誰でも知っているもの、誰でも関係のあるもの、誰でも必要としているもの、必要としているどころか、それがなければ生きていけないもの、なのに、あまり『文章』にされることのないもの」では、「労働」について書かれた文章が取り上げられる。はじめに、イタリアの金具職人の徒弟になった13歳の少年の日記である。メモに過ぎない日記からは、仕事を覚え始めの頃の、少年の懸命に仕事を覚えようとする姿が浮かび上がってくる。著者は、「この『文章』の中に隠れている『健康さ』に」「ちょっと感動した」という。

次に、派遣社員として工場働いた23歳の若者（岩淵さん）の日記が取り上げられる。日記には、工場での単純作業の繰り返しという労働の苦しみに耐えかねている若者の姿が描かれている。「岩淵さんは、『労働の苦しみ』を『伝えたい』と思って、書き始めたのではない。ただ、書きはじめたのだ。それは、ただ、毎日、少しずつ、仕事の様子を書いた」だけである。『そこに何かがある』と教えてくれた『場所』に行き、目を見開いて、そこになにかがあるのか見つめただけなのだ。「実のところ、あらゆる『文章』は、そのように書かれるべきものなのである」という。

最後に、フランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユの『工場日記』を取り上げ、工場で単純労働に従事した彼女がつかんだ単純な真理を紹介する。

「人間は考えることによって人間になる。」しかし、「人間は、苦痛のあまり、考えることをやめてしまうことがある」。「その場所、与えられた場所、そこで生きねばならぬ場所、いまいる場所、そこに佇む自らの姿を見つめること、それが『素人』の考える、なのだ。そのために、『素人』は、いや、ぼくたちは、『文章』を書くのである。

「8 ぼくたち自身の『物語』」では、鶴見俊輔さんの四つの文章が取り上げられる。「校長先生の話」「日米開戦時の個人的な体験」「子どもに自殺

をしてもいいかと訊ねられた話」「盗みをやめない子どもに、盗みなさい、と言った母親の話」が紹介され、それぞれについて細かな分析がなされ、鶴見さんの文章の魅力を解説している。そして、「あるひとりの『人生』の中には、他のどんな『人生』とも交換できない、ただ一つの『物語』が隠れていて、それを語っているのは、その『人生』を語るために生まれた、その『人生』の、一つ一つの、決定的な瞬間に生まれた『一度だけの使用にたえる』ことば」で、「ひとりの人間が書いた『文章』を読みつづけるということは、そのひとりの人間の『物語』を読むことでもある」といい、「文章」を書くために「必要なのは、(真剣に相手の)目を見ること、(落ち着いて、世界でなにが起こっているのかを)耳を澄まして聴くことなのである」といつている。

「9 二〇一二年の夏に、学生たちと」では、ゼミ合宿で読んだ二つの文章に対する学生たちの様子が描かれる。一つは、鶴見俊輔さんの『思い出袋』にある「なぜ交換船にのったか」であり、あと一つは、赤坂真里さんの『東京プリズン』である。ここでは、文章の書き方ではなく、学生たちがそれぞれの文章から受け取ったものを、紹介し、著者はその理解を、あるいは受け入れ、あるいは保留して、この本を閉じている。

ずいぶん大雑把な紹介になってしまったが、著者の、文章を読み、書くことに対する思いが全編に溢れている。と同時に、いまの若者たちに対する深い愛情を感じることができる。

文章教室であるから、文章の書き方が学べる本だと考える人が多いだろう。確かに文章を書きたいと思ったときに、気をつけておくべきポイントについて解説してくれてはいる。しかし、この本を通して著者が伝えたかったことは、他のところにあるように思える。

題材となる文章を挙げて、それを解釈しつつ、解説しているという形を取っているが、題材となる文章とともに、著者自身による若い頃の体験が書かれている箇所がある。「7」の「労働」を扱ったところで、期間工として工場で働いた体験が書かれている。著者自身が「ここは地獄だ」と思っ

たという、三ヶ月の工場体験は、ほとんど記憶に残っていない。「それは、おそらく、ぼくが、考えることをやめていたからだ」という。その頃の著者は、「文章」を書こうとしていたが、いつも書くべき題材がないと悩んでいた。「いま思うなら、ぼくは、まず、ぼくが見ないようにしていた『労働』についてこそ書くべきだったかもしれない。ぼくが生きていたのは、そこだったのに。それがなければ、生きることができなかったのに」と語る。

ここで、いまを生きている若者たちに、いま生きていく現実をしっかりと見て、考えよ。考えて、ことばに変えて、文章として残せ、と語っているように思える。SNSの他愛のないおしゃべりの海の中で、考える時間を取ることもできず、ただ流されるように生きていく多くの若者たちに、一言言いたかったのではないとも思う。

コミュニケーションのために使われていることばが、他者とのコミュニケーションのためではなく、捉えがたいものを少しでも捉えるために、理解しがたいものを理解するために使われることがあり、それが、私たちが生活の中で、文章を書くことによって掴んでいかなければならないものであると、著者は言っている。

貧しい農婦が残る家族に思いを伝える遺書で始まったこの本は、最後ではしっかりと耳を澄まして現実を聴くことを述べて、終わっている。

私たちの生活は、ともすれば時間に追われ、目の前の仕事を片付けることの連続で終わってしまうことも少なくない。その中で、いまという時間をしっかりと自覚的に生きるためにも、書くことを通して考え、書くことを通してしっかり現実を見てもらいたいという、著者の願いが込められた著作である。

内容は、上に簡単に紹介したように、決して気楽に読み飛ばせるものではないが、著者の話し言葉での文章は親しみやすく、ぜひ多くの若い人たちに読んでもらいたいと思う。